

人間性の回復を !!

宮 原 一 武

今年のアグネス祭のテーマは、「人間性の追求」でしたが、大学闘争における中心テーマの一つも、「人間疎外」にあるようです。多くの人々によってこれらの問題が論じられ、様々のことが主張されていますが、現代における最大の問題として、なぜ人間が抑圧され、疎外されるのか、その根本原因は何であるのか。そして、どうしたらいったい人間性は回復されるのかといった問題について考えてみたいと思います。

はじめに言葉の概念をはっきりさせる必要がありますが、「人間性の回復」とか「人間疎外」という時、「人間性」あるいは「人間」とはどんなことを意味するのでしょうか。多分それは、人間を人間たらしめているところのものというような意味でしょうが、しかしそれでは何かすっきりしない感じです。もう少しはっきりした概念として把握したいと思いますが、次のような理解はどうでしょうか。すなわち、この場合の「人間性」とか「人間」の意味は、「人間が生まれながらに持っている基本的な自由」であるというものです。したがって、人間性の回復とは、「人間の基本的な自由の回復」という意味になりますし、人間疎外とは、「人間の基本的な自由が疎外されている」ことを意味することになります。それでは、人間が生まれながらにどのような基本的自由を持っているかというと、それは大別して、「生命の自由」と「生き方の自由」の二つだと思います。「生命の自由」とは、人間は誰でも自分の生命を維持していく自由が、生まれながらに与えられているということです。したがって、どのように正当そうに見える理由によっても、人間は決して殺されないし、また生命の危険にさらされない自由です。しかし人間は生きてさえいればいいというもの

ではありません。「生ける屍」では、もはや人間でなくなってしまうのです。そこで、二番目の基本的な自由として、「生き方の自由」があるのです。これは自由意志による自由な生き方であって、他人に強要されない人生の生き方を意味します。しかしこの自由な生き方は、他人を押しつけ、抑圧し、時には殺害してもよいというような自由ではありません。この自由な生き方は、あくまでも他と真の意味において協調して生きていく中における自由です。

さて、「人間性」あるいは「人間」の概念を、このように二つの基本的な自由としてとらえた時、現代の私達は、これら二つの自由を本当に自分のものになっているのでしょうか。今日、大学問題を含めて、学校教育が様々な面から検討されていますが、私達の最も身近なところから、私達の「人間性」の問題を追及していくことにしましょう。

学校教育の現実

大部分の人が高校程度までの教育を受けるようになり、かなり多くの人が大学教育をも受けるようになりましたが、いったい学校教育とは何なのでしょう。私自身、20年近くもの学校教育を受けてきた自分の体験を振り返ってみて、結局、学校教育のエッセンスは、「試験による点数」であった、という結論に達しました。「立派な人間になる」というようなことを、学校で先生から言われましたが、しかしそんなことは、あくまでも補足的なことであって、最も重要なことは、「いい成績をとる」ということです。80点、90点をとると、「優秀ないい子」となり、20点や30点をとっていると、「デキのよくないわるい子」ということになります。そして更に20点や30点では単位を認定できないから卒業できないという形で、フルイにかけられていきます。学校教育とは、単位認定に必要な点数をとらせる機関であるということが出来ます。もちろん試験は、自己啓発というようにいい面も持っていますが、しかし現実の学校教育においては、学生、生徒の「生き方の自由」を抑圧するものになっていることは事実です。こ

こから何が生まれてきたかという、80点、90点の学生が多く集るということで一流校、20点、30点の者が集るところは三流校といったいわゆる学校差です。更に、いい成績の者は進学できて、わるい者はできない、というところから学歴差が生まれました。その結果、入試地獄が発生し、教育ママによる悲喜劇が問題になっています。そして当の主人公である児童、生徒、学生の「生き方の自由」は完全に否定されてしまい、ある者は自殺し、ある者はノイローゼになり、またある者は、自分が入った学校（または学科）は二流であるという劣等感によって悩み続けるのです。特に悩みを自覚しない者は、現状を、そういうものだとして諦観して、「試験」と「点数」に追いまわされた学校生活を送っていきます。それが人生であり、そういうものに見事パスしていくことこそ、人生における価値の実現であるかのように思いこんで――。

いったいなぜこんなことになるのでしょうか。それは、前に述べましたように、小学校から大学・大学院にいたるまで、学校教育の本質が「人間」ではなく「点数」にあるからです。私達、現代人が、人間よりも点数を大切にする価値観を持つにいたったからです。そして、30点よりも80点の方が価値があるという価値観を持っているからです。このことは就職の際、非常に明白になります。すなわち、学歴差により、そして時には学校差により、就職の機会や給与の高低が決定されます。結局、30点は300円に、80点は800円にというように（ぴったりこの通りではありませんが、原理はこうです。）社会的な評価がなされます。現在の一般的価値観によって判断したこの社会的評価は、一応、妥当です。なぜなら、現実社会で仕事をした場合、一般に30点の人は30の能率をあげますし、80点の人は大体80の能率をあげるのが普通だからです。このような理解がありますので、現実には、社会において、より高い能率をあげ得るような人材の養成ということが、（すなわち、よい成績をとる学生を大量に養成することが）学校教育の最大の課題になっています。そうしますと、学校教育における点数偏重は必ずしも学校側の責任だけではなく、社会全体の責任であるとい

うことになりそうです。それではいったい現代社会における人間はどうなっているのでしょうか。

現代社会の姿

学校が「人間教育機関」ではなく、「高い能率をあげるような人材の大量養成機関」となったのは、現代社会がそのようなものを強烈に要求したからです。そして現代人が、そのような要求に応じていくことによって、別の価値を見出したからです。すなわち現代人は、「高い能率」に非常に大きな価値を見出しました。その結果、現代社会の存立原理は、「合理性・能率性」ということになりました。それは、この現実社会を、または現実の人間生活を、合理的で能率のいいものにすると、「豊かな生活」を実現できるからです。それはまた、ただ単に豊かな生活だけでなく、その国の「経済成長」となり、経済力を強くすることによって、世界における強国になっていくことを可能にするのです。現在の日本は徐々にそのようになりつつありますが、そのような合理性・能率性の原理は、社会において具体的にどのような形で存在しているのでしょうか。

まず社会機構を、合理的能率的に運営する為に、組織化が行なわれます。会社、官庁、学校など総ての社会機構は、より合理的で、より能率的に運営できるように組織化されます。そしてそこでの仕事が合理的に処理されるように、分業が行なわれ、機械化が推進されます。したがって、そこで働く人間というのは、完全にその組織に組み込まれた歯車になります。組織を合理的に運営するには、そこに組み込まれている歯車にも、合理的に回転してもらわないと困りますから、歯車である人間は、合理性によってその基本的な自由を失うということになります。ベルトコンベア、キーパンチャーなどは代表的な歯車ですが、「猛烈社員」や「エリート役人」も、結局は歯車であって、その任務を達成するために、例えば家庭を犠牲にしても、という形でよく働くのです。本当は人間として様々な自由を欲しているでしょうし、家庭の者とも交わる時間を欲してはいるのですが――。

しかし、会社、官庁ばかりでなく、学校の教師のように比較的自由的な職業に見えるものまで歯車化されています。特に最近の小・中・高校の教師は、管理組織にしばられるようになってきているようですし、また文部省によって、がっちり枠組されたカリキュラムに従って忠実に教えるよう定められているようです。結局、教師はカリキュラムに従って忠実に教える **Teaching Machine** になっているのです。無気力な教師が生まれてくるのも当然でしょう。ついでですから書きますと、カリキュラムとは何かというと、それは、社会において、より高い能率をあげようような人材養成プランです。少くともカリキュラムの主流思想は大体そういったものです。

さて、合理性・能率性を原理とする社会は、交通通信のスピードアップを称賛します。その結果、多くの交通通信機関を発達させましたが、自動車の普及もその一つです。しかしながら自動車の普及は、交通事故の激増を促し、連日何百人もの死傷者を生むにいたりました。また企業は、その組織の合理的能率的経営を優先することによって、日本全国の各地に公害や有害食品を生み出しています。また、より合理的で能率的な生活を可能にした都市への人口集中は、いわゆる都市問題を発生させました。

現代社会の存立原理である合理性・能率性は、現代人の欲求に答えて、一面かなりの「豊かな生活」をもたらしましたが、反面、人間から「生き方の自由」を奪い、人間を歯車化し、機械の奴隷にしました。そして更に、交通戦争、公害、都市問題などによって、人間の「生命の自由」をもおびやかすにいたったのです。

合理主義価値観と現代

能率的ということは、結局、合理的ということですが、そのような価値観は、いつごろどうして生まれてきたのでしょうか。これは別にいつごろということではなく、人間は大昔からもともとそのような能率性、合理性を求めて生きてきました。例えば道具を発明したり、土器を作ったりしたのはそのことを示しています。しかし特にその傾向を強めるようになった

のは近代に入ってからです。というよりも、この合理主義の価値観が近代を生み出したのです。封建的な社会から近代社会が生まれてくるには、それなりの原因と、それを可能にした要因があったのですが、その要因となったのが、合理主義の価値観でした。

封建的な社会にあって、人間を抑圧し、その自由を奪うものとなっていたのは世襲身分制でした。百姓の家に生まれたからとか、女に生まれたから、というただそれだけの理由で、その人間の全生涯が決定され、かつ抑圧されていったのです。それが封建的な社会における秩序であり、常識であり、封建的価値観でした。天皇などはそういう世襲身分制の遺物ですが、とにかくそういう身分あるいは家系に高い価値を認めたのが封建的価値観です。現代でもそのような家系などに価値を認める人が決して少ないのですから、封建的風潮が支配的であった時代には、多くの者がこの価値観を当然と思っていても不思議ではありません。中には不満に思った人もいたでしょうが、絶対的に支配的であったその時代の常識化した価値観と、それに基いた封建的社会体制を変革することは出来ませんでした。簡単にいって、その理由は、被支配階級の人々にそれだけの力がなかったからです。あるいは、そのような力が蓄積されないように収奪が徹底していたからです。ところが、長い歴史の中で主として経済構造が変ることによって、被支配階級の人々の中にも経済力を有する者が現われます。そして家系がわるく身分が低くても、経済力という実力がある者は徐々に高く評価されるようになります。それは結局、身分や家系だけが低い価値ではなく、経済力などいわゆる能力・実力もまた価値があるという見方に変ってくるきっかけをつくりました。そして更に、いくら身分が高くても、能力、実力がなくては意味がないということになり、身分が低くても、実力さえあったら当然、高く評価されるべきであるという考え方になってきました。この考え方は、「より実力がある者は、より価値がある」という合理主義の価値観に立脚していたわけです。そしてこの合理主義価値観は、封建的価値観とそれに基く封建社会を否定し、近代社会を実現していくことになり

ます。

このように合理主義価値観は、封建的身分制による抑圧から人間を解放し、自由にしましたが、（同時にこのことにより、自由主義・資本主義が生まれたということに注意して下さい。） もう一つ大きな仕事を果すことになりました。それは、学問の発達、とりわけ自然科学とその応用である科学技術の発達とを促しました。合理的ということは、理性的、学問的、科学的、能率的ということと同じことですから、それは当然のことであったといえるでしょう。科学技術の発達は、いわゆる近代文明の発展をもたらしたわけですが、それは結局、「豊かな生活」をもたらしたといえることができます。このように合理主義の価値観は、人間を封建的な抑圧から解放したばかりでなく、文明を発達させることにより、病気や貧しさから人間を解放するという大きな働きをもしたのです。その意味において、いわゆる合理主義の思想、あるいは合理性に高い価値を認めた価値観は高く評価されるべきであると思います。しかしながらすでに述べましたように、この合理性の追求が非常に高度な段階に達した現代においては、逆にその合理性が人間を疎外し、人間性を奪うものになってしまいました。現代の日本では、その社会体制が資本主義になっていますから、直接的にはこれらの人間性抑圧の原因は資本主義体制ということになります。資本主義自身が封建性を否定し、合理性を追求するところから生まれ、かつ発達してきたのですから、資本主義の考え方は、いわば合理主義の徹底です。したがって資本主義体制は、本質的に人間を抑圧するような要素を持たざるをえないのですが、しかしそれでは社会主義社会になった場合は、そのような疎外や抑圧がなくなるかという点、そういうわけにはいきません。なぜなら社会主義社会になっても、その基本的な価値観は合理主義の価値観であるからです。少なくとも現代の社会主義はそうになっています。したがって社会主義社会であっても、学校教育における点数による差別とか、ベルトコンベア、オートメーションなどは存在せざるを得ないのです。ただ資本主義社会におけるように厳しいものではなく、かなり緩和された

合理化ということにはなるでしょうが、その他の面で人間の基本的な自由を抑圧せざるをえないことが起ってきます。いずれにしても、今後ますますこの合理性の追求、合理化、近代化が推進されていきそうです。そして高度産業社会から情報化社会へと移行していくといわれています。人間生活のほとんど総てがコンピューターによって処理されていき、人間がロボット化されるのもそう遠い未来の話ではなさそうです。

しかし、ここで私達は立止ってよく考えてみる必要があります。いったい学校教育は何の為にあるのか。社会機構が合理化されるのは何のためなのか。科学技術の発達は何のためなのか。いうまでもなく学校教育は点数や成績や単位のためにあるのではないし、社会機構の合理化が、一部の人の利益のためにあるのでもありません。まして科学技術の発達が、原水爆の製造や、宇宙の戦略目的利用にあるのではありません。それらはまさに「人間」のために存在しているはずで、人間がその生命を持続し、かつ自由に生きることを可能にする為にこそ、学校教育も、合理化も、科学技術も存在すべきものです。ところが現実には、反対に、そのような人間の基本的な自由を蹂躪するものになってしまいました。すでに述べましたように、その原因は、現代における合理主義価値観であり、その合理主義がエゴイズムと結びつき易い特質を持っているところから生じたものです。したがって人間性の回復をはかる根本的な解決策は、現代人の誰もが常識のようにして持っているところの合理主義の価値観を否定することです。しかしそれは非常に困難です。ちょうど、封建的な社会にあって、身分による差別が当然だと思いこんでいた人が、それを否定しなさいと言われて困惑したと同じように——。いや、それ以上に困難でしょう。それは自己のエゴイズムをも否定しなくてはならないことだからです。すなわち、一生懸命に勉強したら、いい学校に入れるとか、余計に働いたら他の人よりもお金を沢山もらえる、というような考え方を否定することだからです。

具体的な提案

有名な聖書のことばに、「人はパンのみによって生きるにあらず。神の口から出る一つ一つのことばで生きるものである」というのがありますが、ここで言われている「パンと神のことば」は、人間性回復について考える時、重要な意味を持っていることに気づきます。それは、合理性の追求が、結局はパンの追求であるということに気づくからです。合理主義の精神は近代文明の花を咲かせましたが、それは要するに大量のパンをつくれるようになったということです。学校教育もそのことに貢献したわけですが、点数とか成績というのは、結局パンを意味していたということが理解できるでしょう。人間はパンがなかったら生きていけないのは事実です。ですからパンの追求も必要です。その意味において、合理性の追求を完全に否定してしまうことには、現実の問題として無理があります。しかしながら、人がパンのみで生きられないのも事実です。それどころか、人間がパンのみを追求している現代が、すでに述べたような非常に大きな抑圧力をもって人間を生きられないようにしています。すなわち、パンの追求だけでは人間は生きられないばかりでなく、その人間性をも否定するようになるわけです。そうしますと、やはりもう一方の「神のことば」が、どういうものか検討してみる必要がでてきます。

神のことばについて多くを語る余裕はありませんので、今まで述べてきた問題に関連した神のことばの一つについて、具体的に説明してみます。それは、私達現代人が持っている合理主義価値観に対し、神のことば（聖書）はどのような価値観を持っているかということです。

新約聖書を持っておられる方は開いていただきたいと思います。マタイ伝20章の1節から16節までの物語を読みますと、私達の現代的価値観ではどうも納得のいかない不合理なことが語られていることに気づきます。この物語を要約しますと、朝から働いた者も、夕方ちょっと働いた者も、それぞれが本当に一生懸命に働いたのであれば、全員に同額の賃銀を払うのが正しいことであり、それが神の心であるというものです。私達の

常識で判断しますと、朝から働いた者は夕方ちょっと働いた者よりも、ずっと沢山お金をもらうべきですが、聖書ではまったく同額の1デナリです。これは次のように理解することができると思います。すなわち朝から働いた者は、ブドウを50カゴ摘んだのに対し、夕方ちょっと働いた者は5カゴしか摘まなかったというようなことです。同様のケースで、全員が揃って朝からブドウ摘みをしたと仮定してみます。そして夕方までに各人がどれほどの能率をあげるかはかってみます。多分ある人は50カゴ摘むでしょう。しかしある人は一生懸命に働いたけれども5カゴしか摘めなかったということは充分ありうることです。これは結局、50カゴと5カゴですから前の場合と同じです。この場合、5カゴの人には50カゴの人の10分の1の賃銀を支払うのが合理的です。しかし聖書では、まったく同額を支払うべきであるということです。すなわち聖書の価値観は、決して合理主義の価値観ではないのです。この不合理な価値観が「神のことば」です。

さてそれでは、この神のことばによって、人は本当に生きることができるでしょうか。すなわち、それは人間性の回復をもたらすものでしょうか。聖書の価値観を具体的な私達の問題にあてはめてみましょう。まず学校教育についてですが、点数や成績は不要ということになります。なぜなら、皆が一生懸命に努力しさえすれば、全員、いわゆる成績は同じだからです。しかし今、現状の学校制度の中で、とにかく生きていかななくてはならない現実がありますので、一応、試験をし、成績を出さなくてはならない必要があります。その場合、その成績の意味を空洞化するために、例えば全員の成績を80点というように公表したらいいでしょう。もう少し妥協をした場合でも、全員が80点から90点の間に入るというふうにすべきでしょう。この場合、十分に注意しなくてはならないことは、80点とか90点という点数が問題なのではなく、そのような点数によって、学生・生徒が差別され、その人間性が失なわれないようにすることが問題点だということです。最も根本的なことは、成績などによって人間は決して差別されないという聖書の価値観が広く理解されるということです。

しかし、いくら学校でそのようにしても、現実社会が勝手に試験をして、80点は800円、20点は200円というようにしていって、結局、意味をなさなくなります。そこで次は、同一労働同一賃銀というような、合理主義による賃銀観を否定しなくてはなりません。人間は総て——家庭の主婦も、病人も、身体障害者も——その持場において努力している限り、全員が同一賃銀を受取るべきです。50カゴ摘んだ者も、5カゴ摘んだ者も、まったく同額の1デナリを受取るのと同じです。それは、各人の様々な能力が、根源的には神によって与えられているものである以上、その能力によって差別されるべきではないからです。そのような真の平等を強く主張する運動を推し進めなくてはなりません。

人間性の回復

さて、このような人間の絶対的平等が、もしも実現するならば、人間性の回復はなされるでしょうか。答はもちろんイエスです。まず学校教育について考えてみましょう。今日の学校教育を根本において歪めているのは入試地獄ですが、その原因は、多くの人が多少マシな生活をしようとしたら、いわゆる学歴がないとそれを実現できないからです。ところが、もしもどのような職業についてもまったく同額の賃銀がもらえるということになると、別にノイローゼになるほど受験勉強などする必要はありません。試験も成績も不要です。本当に勉強をしたい人が、自分の興味や能力に応じて進学したらいいのです。すなわち「生き方の自由」が保障されることになります。そうすれば、学校教育、すなわち小・中・高校から大学まで、すべてが産業とか賃銀には直接結びつかない本当の「人間教育」が可能になるでしょう。それは勿論、人間性の回復です。

次は現実社会ですが、今日の社会問題のほとんど総ての根本原因は、経済的差別、すなわち合理性によって差別されるところから起る問題です。差別が厳しく存在する以上、どうしても優勝劣敗ということになり、この過程における争い、更に優者による劣者の抑圧が行なわれるようになりま

す。現代の権力とは優者のことですが、具体的に優者とはどんな人かという、それは80点、90点をとる人のことです。この80点、90点の人が大企業、官庁、大学、政界などに入って権力者となり、20点、30点の人達を抑圧するようになるのです。この場合、なぜ80点、90点が権力になるかというと、それは、20点、30点よりも経済的に優位に立ち、経済力を握るようになるからです。昔から、経済力をともなわない権力というものはありませんでした。したがってもしも、絶対的平等賃銀が実施されるようになると、この弱者を抑圧するような権力は消滅します。すなわち権力によって抑圧されていた大部分の民衆は、その人間性を回復するでしょう。更に、賃銀による差別がなくなると、人間の行動は、より高い人間性を志向するようになるでしょう。というのは、今まで人間に労働意欲または行動の動機を起させていたものが、主として「より高い報酬」すなわち打算心であったのに、それが取除かれるからです。実際、賃銀に合理的な差別を設けることによって、私達は人間が人間である意味、すなわち人間性を拒否されてきたのです。人間が勉強し、労働し、行動する意味を、「より高い報酬」、すなわち打算のためであるというように規定させられてしまったのです。そして人間の活動が実際にそのようになってしまいました。学生、生徒が勉強するのは、将来「より高い報酬」を得るためです。大学の先生が学問という名で研究するのは、業績をあげて早く教授になり、更に社会的名声を得て「より高い報酬」を得るためです。公務員は「より高い報酬」に結びつくものの為にしか働きません。民間会社は「より高い報酬(利益)」のために、公害も有害食品も無視します。政治家は、自己にとって「より高い報酬」となるような政治をし、国会運営を行ないます。労働組合も、自己にとって「より高い報酬」になるような運動を展開します。そして更に「より高い報酬、より高い利益」を求めて、強者は弱者を蹴落とし、侵略戦争をもするようになるのです。

合理性の追求がパンの追求である以上、それを全面的に否定することはできないでしょう。したがって、合理的・能率的になることによって引起

される人間疎外の問題を、完全に取除くことは困難だと思います。しかし上に述べたように合理的な経済差別（または賃銀差別）を是認するところから生まれる合理的エゴイズムは完全に否定されなくてはならないでしょう。実は今日、私達が人間性の回復を叫ばなくてはならないのは、これらの合理的エゴイズムによってひきおこされた人間否定を告発するためなのです。

ところで「絶対的平等の社会になると、人間は怠けるようになるし、また社会が進歩しなくなるから、やはり現状が正しい」という考え方があります。確かに人間には怠ける心がありますので、現在のように欲望刺激によってその怠ける心を牽制することが考えられます。しかしそれでも完全にその怠け心を押えることはできません。ただ一つ完全を期待できる可能性として考えられることは信仰ですが、自己の欲望のためでなく、神のためという動機で、人間は非常に力強く生きることができるものです。このような信仰が総ての人に確立されていくことが根本的ですが、しかし欲望刺激のような人間否定の方法をとらなくても、人間はもともと自発的に自分の力で怠心を押える力を持っていると私は思います。例えばスウェーデンなど社会保障がよくいきとどいている国で、老人の自殺が非常に多いということがそれを証明しています。すなわち老人達にとって、毎日毎日、働かないで怠けていることには耐えられないのです。確かに人間は多少の怠心を持っていますが、それ以上にもともと働きたいという意欲をも強く持っているのです。現代の経済的差別（差別賃銀）は、その人間の勤労意欲に対し鞭の役割を果し、能率向上、合理化が優先されているわけです。

次は、上のこととも関係がありますが、「社会が進歩しなくなる」という点についてです。この批判に対して、まず第一に言いたいことは、「いったい何が真の進歩であるか」ということ、そして二番目は、「今日の進歩が人間を幸福にしているか」という点です。私達が一般に物質的進歩を謳歌する時、同時に精神の退廃が進んでいることを認めなくてはなりません。

ん。例えば、昔の結核患者は非常に真剣に病気と闘いましたが、今日の患者は医者^の注意をも守らなくなっている、というようなことです。ですから、いったい何が真の進歩であるのか、ということに関し疑問が残ります。次に、今日の進歩と繁栄が、本当に日本の総ての人々にとって喜びになっているかという点です。昭和元禄といわれている今日、なぜ「豊かさの中の貧困」が存在するのでしょうか。なぜ大学紛争が、高校紛争が起るのでしょうか。なぜ公害その他の社会悪がまかり通るのでしょうか。それはすでに述べましたように、経済的差別による「鞭の上に咲かせた花」であるからだろうと思います。すなわち政治家は自己の利益になるよう政治を行い、今日の進歩と繁栄に結びつけました。大学教授は、自己の利益になるような研究に努力し、進歩と繁栄に貢献しました。民間会社は、いうまでもなく極大利潤を求めて経営に努力し、今日の進歩と繁栄をもたらしました。労働組合も自己の利益になるような運動に努力し、また労働に従事して進歩と繁栄に貢献しました。そして学校教育も、点数のいい学生生徒を大量に生み出し、有名校になるよう努力して、今日の進歩と繁栄に協力しました。そのようにして出来上ったのが、今日の進歩であり繁栄です。一言で言いますと、差別による合理的エゴイズムの総計として今日の進歩があるのです。そのようなエゴイズムの塊としての進歩や繁栄が、どうして人間を真に幸福にし得るのでしょうか。それは結局、人間性を否定するようなものにしかありません。事実がそのことを証明しています。

自己の利害とは関係なく、人間のための政治が行なわれ、個人の利益にはかかわらない人間のための学問が行なわれ、人間のために生産活動が行なわれ、人間のための教育が行なわれる、その結果もたらされる進歩こそ、人間を真に幸福^〇にしていくものだと思います。いわゆる進歩は多少遅れるとしても——。絶対的平等の価値観は、そのような真の進歩を生み出すものになるでしょう。すなわち真に人間性を回復させ得る価値観は、神のことば——聖書の絶対的平等の価値観です。

具体的な行動

人間性の回復について、私達がどんなに考え、議論しても、それだけでは人間性の回復を実現することはできません。具体的に私達一人一人が、そのために行動する必要があります。いったい何をしたらいいのでしょうか。

まず第一は自分自身の変革です。すなわち私達の誰もが現在もっている合理主義の価値観、少くとも合理的エゴイズムを否定することです。それは例えば、他人より多く働いたから沢山お金をもらうのは当然だという考え方を改めることです。また成績によって差別する考え方を否定することです。そしてそれらのことを具体的な行動に移していくことです。それは結局、自己変革ということであり、従来の価値観を否定し、聖書の価値観に立つということです。その意味において、前にも述べましたように、根本的には信仰の確立によらなくてはならないと思いますが、しかしそのことに気づいた人は誰もが、その方向に向って前進する必要があります。そのようにして、この社会に対して少い者であってもいいから何が本当に真理であり、本当に人間性を回復するものであるかを証していかななくてはなりません。

非常に身近なところで、具体的な証をしていくべき一例をあげてみます。現在、大学の先生は、どこでも教授、助教授、講師などというように身分が分けられ、待遇もそれぞれ異なるようにできています。これは明らかに合理主義の価値観にもとづく差別ですから、一本化されるような方向に改められなくてはなりません。更に、学校教育の中におけるそれぞれの教師の給与体系は、幼稚園の先生が最も安く、順に、小中、高、大学と順に高くなるように出来ています。このことは例えば、幼稚園の先生が60点であるのに対し、大学の先生は80点であるというようなところからきています。事務職員の人とか作業員の方は、先生達よりも低い水準におかれていることはいうまでもありません。このような身近なところから、特に「教育の場」である学校において、合理主義エゴイズムの否定が実現されなくてはならないでしょう。とりわけ、キリスト教主義学校は、卒先して社会に証

していくという使命をもっていると思います。

二番目に具体的な行動として私達がしなくてはならないのは、あらゆる人間性否定の動きに対して、反対運動をし、人間を守るための運動に積極的に参加していくことです。それは、反戦運動であり、反安保・沖縄返還要求運動のような政治運動であることもあります。また部落問題、精薄児問題など政治問題と社会問題とにまたがった運動もあるでしょう。更に、ビアフラの子供を救う問題とか、社会福祉施設の活動を支援していくような運動もあります。いずれにしてもこれらの運動は、権力者、力の強い者、すなわち80点、90点の者に対する抵抗運動であり、そのような強い者によって虐げられている弱い人々の味方になっていく運動です。人間性の回復をはかる運動です。

—了—